

戦前日本の聴覚障害児教育における職業教育と 進路保障に関する歴史的考察

－明治末～昭和戦前期の各種聾啞教育大会等の議論の検討を通して－

平田勝政* 橋本亜沙美**

A Study on the Vocational Education and Career Guidance
in the Education for the Deaf in Japan before World War II

Katsumasa HIRATA Asami HASHIMOTO

1. 研究の目的と方法

本研究は、障害児の自立と社会参加にとって要となる職業と進路をめぐる問題を歴史研究の立場から考察しようとする一連の研究作業のひとつである。本研究では、聴覚障害児に焦点をあてて、戦前の日本における全国聾啞教育大会等の関係資料を分析対象として、戦前の聴覚障害児教育における職業教育・進路保障をめぐる議論の変遷とその特徴の全体像を概括し、今後の研究の手がかりを得ることを目的とするもので、視覚障害分野¹⁾の続編である。

まず戦前の全国聾啞教育大会等における職業教育関係の議論を整理すると資料1のようになる(末尾資料1参照)。そこでの聴覚障害児の職業教育・進路問題をめぐる議論を検討すると、その展開過程は、①第1期：1906年の全国聾啞教育大会から1919年の第1回全国盲啞学校長会議までの時期、②第2期：同校長会議後の1920年から1937年までの時期、③第3期：1938年から1940年代前半(終戦)までの時期、に分けて把握することができる。以下、各期を概括する。

2. 第1期における職業教育関係議論の展開とその特徴

(1) 1906年から1917年までの議論

1906年9月～12月開催の凱旋記念五二共進会に日本聾啞技芸会(監督・青山武一郎)は、聾啞者の作品を出品した。同技芸会内部には、絵画部、彫塑部、写真部、漆工部、指物部、裁縫部、靴工部、金工部の8部門が設置されていた。五二共進会への出品と連動して、聾啞教育講演会・全国聾啞教育大会が10月に開催された。同講演会・大会において、「不生産的の人が生産的の人になる」ことを目指して教育(職業教育)振興の議論が開始された。具体的には、小西信八が、講演「欧米聾啞技芸の発達」の中で、西洋における職種として、「建築、図案、麵包を焼くこと、髪を苴ること、籠を拵へること、鍛冶屋」などを紹介し、青山武一郎は、「聾啞の高等技芸専門学校」の設置を提起した。以後、全国大会を開催して、職業教育の議論を積み重ねていった。

第2回大会(1908年)では、「聾啞に最も適当なる職業如何」が討議され、第3回

*人間発達講座

**長崎大学大学院教育学研究科修士課程院生

大会（1911年）においては、「盲啞に最適當なる新職業を研究すること」等が協議題として提出・議論されている。さらに、第6回大会（1917年）では、「聾啞生に適當なる職業」（談話題）が議論され、森清克（大分校）等より各学校での実践が報告・紹介された。

この時期は、当初、日本聾啞技芸会による積極的な職業教育振興策（高等聾啞技芸学校設立）が提起されたが、政府の放任政策のもとで、全体的には、私立盲啞学校での職業教育の取組みに関する情報交換の段階に留まったと言える。

(2) 第1回全国盲啞学校長会議（1919年）における議論—第1期から第2期への転換—

この会議は、文部省が初めて盲聾啞教育に関与・召集した会合である。同会議に文部省は、「盲学校及聾啞学校に於て課すべき職業の種類如何」を諮問し、その答申は、まず職業科の種類を選択する際の留意すべき標準（基準）として、①生産的にして成るべく独創力を要せざるものの中より選ぶこと、②健康上に害少なきものを選ぶこと、③土地の状況に適切なるものを選ぶこと、④経済上の激変少なきものを選ぶこと、⑤口と耳を利用すること少なきものを選ぶこと、⑥分業的のものを選ぶこと、の6点を示した。さらに、その基準に基づく代表的な職業の種類として、男子には、裁縫、家具、彫刻、図画、表具、園芸、牧畜、編物、刺繡、染織、洗濯、点物（傘提灯）、女子には、裁縫、刺繡、染織、編物、造花、洗濯、園芸、を例示した。

この会議は、1910年代までの聾啞教育界における技芸教育の成果を集約し、新しい職業教育への転換でもあった。

3. 第2期における職業教育関係議論の展開とその特徴

第2期は、1931年の財団法人聾教育振興会の設立を契機として前半と後半に分けてとらえることができる。以下、その点を具体的に見ていく。

(1) 1920年代を中心とする前半期の議論

1920年代は、アメリカの職業指導運動の影響があらわれ、口話法の導入と相俟って、聾教育における職業教育が新展開をみせる時期である。とくに、文部省の「児童生徒ノ個性尊重及職業指導ニ関スル件」（1927年）による「個性」調査に基づく職業指導が展開されていく点に特徴がある。

例えば、最初の現れは、第3回総会（1927年）における職業選択の際の基準で「個性」を考慮することが提起されている点に見られる。

また、第3回総会では、「聾啞者の職業に就て」²⁾と題し、川本宇之介（東京聾啞学校教諭）が研究発表を行い、その中で、日本とアメリカの聾啞者の職種・職業教育を比較して、その相違点の1つに、アメリカの聾啞者は「普通人と意志を通じ、話が出る」と述べ、そのことが職業種の拡大につながっていることを紹介した。

(2) 1930年代中盤までの後半期の議論

1930年代中頃までを中心とする議論は、1920年代の議論をより具体化するために組織的展開が強化されていった点に特徴がある。その点が典型的に見られるのは、日本聾啞教育会総会で言えば、1932年の日本聾啞教育会第8回総会、1937年の同第13回総会であり、上記した財団法人聾教育振興会の設立（1931年）を契機として、1931年から開始される一連の職業指導講習会である。以下、具体的に見ていく。

表1 財団法人聾教育振興会主催の聾啞者工芸講習会・職業指導講習会一覧

No.	講習会名・期間	会場	科目・教授時数・講師	定員	出典
1	第1回聾啞者工芸講習会 (1931.8.3～8.22)	東京聾啞学校	修養講座(3時間)樋口長市 修養講座(3時間)川本宇之介 常識講座(12時間)鎌田栄八 木工講義(18時間)中島昇三 木工実習(90時間)中島昇三	15名	「聾口話教育」第7巻第7号, p.16, 1931年
2	第2回聾啞者工芸講習会 (1932.8.1～8.20)	東京聾啞学校	修養講座 木工製図及び実習	約15名	「聾口話教育」第8巻7号 p.20, 1932年
3	聾啞者婦人子供裁縫講習会 (1933.7.14～2週間)	東京聾啞学校	<修養>樋口長市, 山岡勘一 <婦人子供服裁断及調整>高橋順子	20名以内	「聾口話教育」第9巻第7号 p.12, 1933年
4	聾啞者職業指導講習会 (1934.8.10～2週間)	愛知県立聾学校	<修養> 橋村徳一, 松岡若義, <木工> 大竹, 香取五郎 <ミシン裁縫> 青木仙五郎, 春田可寿, 若杉満津代, 山口こゑん	<木工科>5名 <ミシン裁縫科>20名	「聾口話教育」第10巻10号 pp.50-51, 1934年
5	第5回聾啞者職業指導講習会 (1935.7.30～8.8)	東京聾啞学校	修養講義(10時間) 家具製図(20時間) 木工実習(30時間) 塗装実習(10時間)		「聾口話教育」第11巻第9号 p.64, 1935年
6	第6回聾啞者職業指導講習会 (1936.7.26～8.4)	東京聾啞学校	<修養科>樋口、川本 <婦人子供服科>高橋順子	14名	「聾口話教育」第12巻第9号 p.64, 1936年
7	第7回聾啞者職業指導講習会 (1937.8.15～2週間)	愛知県立聾学校	<第一部ミシン裁縫初歩>若杉満津代 <第二部婦人子供服科>春田かず <第三部大人男子服科>小川豊 <各部共通講義>橋村徳一, 伊藤正長	22名	「聾口話教育」第13巻第10号 pp.62-63, 1937年

第8回総会では、文部省が「盲聾啞教育に関し各校に於て特に施設せらるる事項の要綱及実績を問ふ」を諮問し、その答申で、心理検査(知能・適性検査)を行い、職業教育の参考にしている学校が数校あると報告している。

第13回総会で、文部省は「聾啞者の性能に適合せる職業科の種目如何」を諮問し、その答申は、「聾啞者の性能」を精神面と身体面の二方面から把握した上で「職業選択の方針」と「職業科の種目」を提案した。精神的方面の特長は、視覚の鋭敏性、豊かな模倣性、性格の従順性、動作の軽快性、手先の器用さ、表情の豊かさ、があげられる反面、観察力の粗漏性、創作力の乏しさ、思想の単純性、物事への固執性等の消極的な性能への配慮も指摘している。身体方面では、失官原因による身体の虚弱性への配慮をあげている。「職業選択の方針」では、①個人の境遇、②社会的関係、③職業の性質を考慮し、「職業科の種目」としては工芸科、裁縫科、手芸科、農業科、図画科、洗濯科、印刷科、調髪科、染色科の9科を選定している。接客業で一定のコミュニケーション能力を必要とする調髪科(理髪・結髪・美容等)が選定されている点が注目される。

次に、一連の職業指導講習会を見ていくと、表1に整理したように、計7回の講習会が開催された³⁾。同講習会開催の背景には、資料1に見るように1927年の日本聾啞教育会第5回総会、1930年の全国盲聾啞教育大会での卒業生の指導教育・職業保護に関する議論が影響していると考えられる。同講習会は、現に就職している聾啞者に対し、工芸または婦人子供服、またはその両者に関する技術の進歩への対応、並びに修養講座に見られるように職業人としての心得養成のため、1931年から1937年まで、毎年夏季の1週間から2週間を会期として開催された。東京において5回、名古屋において2回、計7回開催し、1938年以降中止となった。⁴⁾

表2 聾啞者の職業教育における職業選択指針・職種・職業科一覧

大会名	第1回校長会議 (1919年)	第3回総会 (1927年)	第13回総会 (1937年)
職業種・職業科選択の基準	①生産的にして成るべく独創力を要せざるものの中より選ぶこと ②健康上に害少なきものを選ぶこと ③土地の状況に適切なるものを選ぶこと ④経済上の激変少なきものを選ぶこと ⑤口と耳を利用すること少なきものを選ぶこと ⑥分業的のものを選ぶこと	①身体個性及家庭の事情を考慮すること ②脳力障害より来たる危険の少なきものを選ぶこと ③土地の状況を考慮すること ④成るべく交渉対応の少なきものを選ぶこと ⑤成るべく家庭の個人的に従事し得るものを選ぶこと	聾啞者の性能を精神的、身体的方面から捉え、それらを受け、職業選択の方針が示されている。 ①聴覚を主要とせざるものたること ②聴力障害より来る危険性の少なきものたること ③土地の状況を考慮すること ④流行の推移変遷頻繁ならざるもの ⑤成るべく交渉対応の少なきものたること ⑥性能の短所はよく之を考慮しこれに応ずる不適職は避くべきこと
職種・職業科	<男> 點物、(傘提灯)家具、表具、裁縫、編物、刺繡、園芸、牧畜、彫刻、図画、洗濯、染織 <女> 裁縫、刺繡、編物、造花、園芸、洗濯、染織	和洋家具職、和洋建具職、竹細工、籐細工、轆轤細工、折函ボール紙細工、履物職、靴工、金工、鍍力細工、金網職、傘及提灯職、陶工、塗工、畳職、和洋裁縫、刺繡、造花、メリヤス編、製糸工、農業、園芸、牧畜、養蚕、養鶏、養蜂、養魚、画工、図工、彫刻、洗濯、寫真師、活版印刷職、石版印刷職、製本、理髮、結髪等、染織工、義歯工	工芸科(木工・竹工及籐工・金工・陶工・実石工・塗工・彫刻・皮革毛工・紙細工・畳工) 裁縫科(和服・洋服) 手芸科(刺繡・編物・袋物等) 農業科(農業・園芸・養畜・養魚) 図画科(油絵・ペンキ画・日本画・図案・製図等) 洗濯科(和式・洋式) 印刷科(活版・騰寫・石版・タイプライター) 調髪科(理髮・結髪・美容等) 染色科(染物各種)

4. 第3期における職業教育関係議論の展開とその特徴

この時期の聾教育は、皇国民練成を目指した職業教育が展開された時期である。例えば、第15回総会(1939年)では、「聾啞者を官立軍需工業に参加の途を講ぜられんことを其の筋に建議するの件」が原案通り成立したところにそのあらわれを確認することができる。また、第16回総会(1940年)で、文部大臣(橋田邦彦)は、その「祝辞」の中で、「皇国の将来」は、「国家総力の發揮」にあるとして、聾啞者に「皇国民たるの資質鍊成」の重要性を説いた。それを受けて第16回総会での「宣言」では、紀元2600年に際し、「東亜の新秩序樹立」のため聾啞者の「水準を正常の人に高め悉く皇国有為の民たらしめんこと」を日本聾啞教育会総会の総意として決議した。

一方、1938年以降の雑誌関係⁵⁾の論文を検討すると、「聾啞教育」誌の中に、「皇民練成の職業教育」(松本周吉, 1941年)⁶⁾が登場し、「聾啞の光」誌には、「聾啞産業戦士」と題する連載ものが登場する⁷⁾。このように第3期では、学校教育と企業(軍需産業)とが結びつき、皇民教育を推し進める中で、聾者は、銃後の戦線において職業に従事することが役目であるという「皇民鍊成」の目的が顕著となる。総力戦体制下において、関係者は、聾啞者を「生産力の拡充」に積極的に参加させることが、皇国の要請に応えることであり、そこに聾啞者の職業指導と進路保障の方向性を見出していった。

5. まとめと今後の課題

最後に資料1の中から主な議論に注目して再整理すると、表2のようになる。まとめ

ると、①1919年の第1回校長会議が、それ以前の議論の成果を集約して、聾啞者の職業教育に一つの指針を確立し、さらにアメリカの職業指導運動のわが国への紹介・導入を背景に技芸教育を職業教育へと転換させたこと、②1927年の第3回総会が、1920年代における職業指導運動の普及・発展を背景にして、「個性」調査の結果を職業選択に結合させながら、職種を拡大していったこと、③1937年の第13回総会が、「個性」をさらに「性能」に転換させ、職業選択の指針をより明確化した上で、聾啞者の職種を整理・統合して、「適職」のための職業科と職種を確立していったこと、である。

今後の課題は、①戦前の聾啞児教育関係の図書・論文に見る職業教育論の系譜を整理した上で、小西信八・樋口長市をはじめ、口話法の橋村徳一・西川吉之助・川本宇之介、手話法の高橋潔に代表される人物の聾啞児職業教育論を検討し、口話法・手話法と職業教育の関係を解明していくこと、②九州に根ざす研究としては、戦前の九州で開催された西部盲啞教育協議会・九州盲啞教育研究会等での聾啞児の職業・進路問題をめぐる議論の変遷とその特徴・到達点を検討すること、③長崎に根ざす研究としては、戦前の私立長崎盲啞院（1898年）～長崎県立聾啞学校（1929年県立移管）における聾啞児の職業教育と進路実態を実証的に解明していくこと、である。

<註>

- 1) 平田・久松：戦前日本の盲学校教育における職業教育と進路保障に関する歴史的考察「長崎大学教育学部紀要（教育科学）」第65号，pp.29～44，2003年6月
- 2) 川本宇之介：聾啞者の職業に就て、「聾啞界」第40号，1927年10月
- 3) その他に、「職業教育協議会」が開催されているが、その全体像の解明は今後の課題である。
- 4) 財団法人聾教育振興会小史（二），「聾口話教育」第16巻8号，1940年8月
- 5) 「聾啞界」，「聾啞教育」，「聾口話教育」，「聾啞の光」
- 6) 「聾啞教育」61号，1941年1月
- 7) 「聾啞の光」福祉号創刊号1942年7月，第1巻第6号1942年10月，第1巻第8号1942年12月，第1巻第10号1943年2月，第2巻第1号1943年5月，第2巻第3号1943年7月，第2巻第5号1943年9月，第2巻第7号1943年11月，第2巻第11号1944年2月，第3巻第1号1944年5月，第3巻第3号1944年6月

（付記）

本研究は、日本特殊教育学会第44回大会（2006年9月 於・群馬大学）において発表した共同研究「戦前日本の聴覚障害児教育における職業教育と進路保障に関する歴史的考察」（『日本特殊教育学会第44回大会発表論文集』603頁所収）と当日配布資料を修正・加筆したものである。共同討議を経て、橋本が第一次稿を執筆し、平田が点検・修正・加筆したものである。

<資料1>

明治末期～昭和戦前期の全国盲啞教育大会・日本聾啞教育会等における職業教育関係記事一覧
(橋本・平田作成)

No.	大会・会議名	職業教育関係記事内容/検討資料の出典	
1	聾啞教育講演会・全国聾啞教育大会 (1906.10.13～15) 於・東京盲啞学校	内容	「不生産的の人が生産的の人になる」ことを目指して日本聾啞技芸会主導で開催。 「日本聾啞技芸会規則」によれば、同会内に職種8種目(9種目)設置→絵画部, 彫塑部, 写真部, 漆工部, 指物部, 裁縫部, 靴工部, 金工部, (標本部) 小西信八は, 講演「欧米聾啞技芸会の発達」の中で, 西洋における職種として, 「建築, 図案, 麵包を焼くこと, 髪を茹るること, 籠を拵へること, 鍛冶屋」などを紹介し, 青山武一郎は, 「聾啞の高等技芸専門学校」設置を提起する。
		出典	日本聾啞技芸会『聾啞教育講演会 第一回全国聾啞大会 日本聾啞技芸会出品報告』
2	第1回日本盲啞学校教員大会 (1907.5.11～13) 於・東京盲啞学校	内容	大会の詳細な内容が不明のため, 未確定
		出典	「日本教育」第47号(1907.5)
3	第2回日本盲啞学校教員大会 (1908.4.7～10) 於・京都市立盲啞院	内容	(1日目)「高等聾啞技芸学校の設立の可否(日本聾啞技芸会提出)」→「異議なく可決した」(①より) (2日目)「四. 聾啞に最も適当なる職業如何」→討議の結果「現今実施せる図画, 木工, 裁縫, 彫刻等の外, 広義に於る農業を課するを最も適当とする事」(②より)
		出典	①全国盲啞教育大会「教育時論」第82号(1908.4.15), ②全国盲啞教育大会(統)「教育時論」第829号(1908.4.25), ③三浦浩: 第二回日本盲啞学校教員大会の記「口なしの花」第3号(1908.7)
4	第3回全国盲啞教育大会 (1911.7.18～25) 於・東京盲学校	内容	▶議案「九. 盲啞に最適当なる新職業を研究すること」(岡崎校提出)(③より) 議決の結果「盲啞者に適当なる新職業を, 研究せんといふ原案には, 満場賛成なるも, 其研究方法に就き, 各自研究して次回までに報告すること, 委員を挙げて研究せしむることとの両方法案出で, 何れも少数にて結局原案不成立となった」(②より) ▶議案「八. 聾啞学校に設置すべき技芸科は如何なるものを以て最適当とするか但都村男女に区別すること」(③より) 議決の結果「聾啞学校の技芸科に適当なるものにつき, 意見及実験の交換あり」(②より)
		出典	①全国盲啞教育大会「教育時論」第944号(1911.7.5), ②全国盲啞教員大会「教育時論」第947号(1911.8.5), ③全国盲啞教育会「帝国教育」第349号(1911.8), ④『第三回全国盲啞教育会報告』(全145頁)(1911.10)
5	第4回全国盲啞教育大会 (1913.10.21～27) 於・大阪市立盲啞学校	内容	▶議案「聾啞卒業生に対する学校の保護法(附結婚の件)及職業」(和歌山) ※詳細不明
		出典	第四回全国盲啞教育大会提案「内外盲人教育」第2巻夏号(1913.7)
6	第5回全国盲啞教育会 (1915.7.21～24) 於・東京聾啞学校	内容	通案(一), (二), (三)の具体的案「七. 盲人, 聾啞人並に盲聾啞人に対する保護事業を經營すること」(③より)
		出典	①全国盲啞教育会「教育時論」第1091号(1915.8.5), ②第五回全国盲啞教育大会「内外盲人教育」第4巻春号(1915.6), ③第五回全国盲啞教育会概況「内外盲人教育」第4巻秋号(1915.10)
7	第6回全国盲啞教育大会 (1917.7.23～27) 於・京都市立盲啞院	内容	▶談話題「聾啞生に適当なる職業(熊本, 大分, 鳥取)」(④より) 提案者戸田信貞氏(鳥取)自分の学校にては未だ実験したることなし何卒諸君の実験談を拝聴したしと述べ 森清克氏(大分)も実際に課せられたる模様を承はりたし且具体的でも抽象的でも宜しき故に十分に意見を陳述せられんことを以てしたりしに或は絵画可なり或は農業可なり或は仕立職可なりと色々の経験及至理想談ありたり 小西信八氏は同校卒業生の現況につき統計表を以て詳細に述べられたり 大塚米蔵氏(朝鮮)は同校にて目下ミシン裁縫科のみを課し居りて夫々民間の該業店と協議して聾啞生使用を依頼しつつあり来年度初めて該科卒業生を出すべき予定なれば其上にて成績を十分明らかにし得べし, 要するに朝鮮に於ては内地の学校の如くに教授科目として某々科目を予め設置せずに生徒個人個人の性質に依りて各種の職業に就かしむる方針を採り居れりと述べ 宮島茂次郎氏(大阪)は農業科設置を希望する趣述べられたり(④より) ▶談話題「聾啞生卒業後実況及指導方法(福岡, 岡山, 鳥取)」(④より) 提出者吉村誠氏(福岡)諸府縣に於ける実況の状況を問はれたりしが餘り実行せられたる様に見受けられざりき特り 寺町二郎氏(京都)は舊京都盲啞院長鳥居嘉三郎氏が聾啞生十五人を收容して実行せられたるつつある保護院の実況につき述ぶる所ありたり(鳥居氏の質

			問応答によれば聾啞生は目下十五人を收容し盲人は只口入即ち按摩の依頼等他よりの依頼に応じ紹介するのみにて足れり在院のとき聾啞生の盲人に比較して手の懸ることを常に感じつつありしが實際界に入りたる後は一層聾啞生の社会的位置の卑きを感じたりたとへば意匠画を以てせんか世間は年々流行を異にせり昨日の意匠も今日は已に陳腐に属せる有様なり然るに聾啞生の眼力は更に是等流行の変化を見透くこと能はず只舊態を墨守するのみ故に是等につき一々詳細に指導せざれば聾啞生の効能率は更になきものなり其他注文期日をば重要視せざる等挙げ来れば実に骨の折れるものたり云々 橋村徳一氏（名古屋）は修業年限の延長をなして十分に教育せざれば不可なる所以を述べられたり（④より）
		出典	①第六回全国教育大会問題「内外盲人教育」第6巻夏号（1917.7.）、②全国盲聾教育大会「教育時論」第1163号（1917.8.5）、③町田則文：第六回全国盲聾教育大会状況「教育界」第16巻第12号（1917.9）、④第六回全国盲聾教育大会における講演～第六回全国盲聾教育大会「内外盲人教育」第6巻秋号（1917.10）
8	第1回全国盲聾学校長会議 （1919.12.1～4日間） 於・文部省内修文館	内容	文部省第三諮問案「盲学校及聾啞学校に於て課すべき職業の種類如何」 「乙（聾啞の部）第一、聾啞学校に於て課すべき職業科の種類を選択する標準を定むること左の如し（一）生産的にして成るべく独創力を要せざるものの中より選ぶこと（二）健康上に害少なきものを選ぶこと（三）土地の状況に適切なるものを選ぶこと（四）経済上の激変少なきものを選ぶこと（五）口と耳を利用すること少なきものを選ぶこと（六）分業的のものを選ぶこと第二、右の標準により其代表的のものを男女別に選択すること左の如し 男、裁縫、家具、彫刻、図画、表具、園芸、牧畜、編物、刺繍、染織、洗濯、点物（傘提灯）女、裁縫、刺繍、染織、編物、造花、洗濯、園芸 第三、注意義務教育終了後三ヶ年乃至五ヶ年課すべきこと」（②より） ▶全国盲聾学校長会議へ提出の協議題並提出者氏名「一、盲聾者保護法案を設けられんことを建議する件 福島県郡山訓盲学校」（②より）
		出典	①全国盲聾学校長会議「教育時論」第1248号（1919.12.15）、②全国盲聾学校長会議「内外盲人教育」第8巻冬号（1920.2）、③江幡龜寿「社会教育の實際的研究」（博進堂）（1921）
9	第7回全国盲聾教育大会 （1920.11.25～29） 於・名古屋市立盲聾学校	内容	「話題三、聾生技能科に於ける実際の成績状況如何。（香川）」 「談話題六、一二歳以上の聾啞生徒の入学者に最初より職業を課して学科及教授の時間数を減少することの利害但し年数を延長すること。（神戸聾）」（②より）
		出典	①盲聾教育大会諮問「教育時論」第1283号（1920.12.5）、②第七回全国盲聾教育大会「聾啞界」第22号（1920.12）
10	第1回聾啞教育大会 （1921.7.23～25） 於・東京聾啞学校	内容	職業教育に係わって特になし
		出典	盲聾教育大会「社会と教化」第1巻第8号（1921.8）
11	第2回全国盲聾学校長会議 （1924.2.25～27） 於・東京聾啞学校	内容	「建議並ニ協議案（一）文部省へ建議事項協議案 十二、学齡児童ノ盲児童及聾啞児童ヲ徒弟トシテ雇用セザル訓令ヲ発セラレタキト 否決」（①より）
		出典	①第二回全国盲聾学校長会議「帝国盲教育」第3巻第4号（1924.5）、②第二回全国盲聾学校長会議「聾啞界」第30号（1924.6）
12	第9回全国聾啞教育大会 （1924.5.26～29） 開催校・広島県立盲聾学校	内容	文部省諮問案「盲聾者に対する最適切なる社会教育施設方案如何」 諮問各申案「盲聾者に対する最適切なる社会教育的施設に関しては左記各項に留意し夫々必要な方法を講じ之が実績を挙げんことを要す。一～二、省略 三、職業の指導奨励をなすこと。イ）授産所を設くること。ロ）職業紹介所及相談所を設くること。四～二十二、省略」
		出典	第九回全国聾啞教育大会概況「聾啞界」第30号（1924.6）
13	第1回日本聾啞教育会総会 （1925.10.17～19） 開催校・大分県立盲聾学校	内容	「話題（四）聾啞学校に於て「技芸科、裁縫科、図画科、其他」教師採用承りたし（石川）」
		出典	帝国盲教育第三回・日本聾啞教育会第一回総会通知「帝国盲教育」第5巻第2号（1925.10）
14	第2回日本聾啞教育会総会 （1926.6.4～5） 開催校・宮城県立盲聾学校	内容	「六、聾啞部談話題」（一）～（四）省略 （五）各聾啞学校技芸科卒業者の成績につき承りたし（島根） （六）聾啞学校に於て技芸科（裁縫科工芸科等）教員採用の實際に就て承りたし（石川）
		出典	第二回日本聾啞教育会総会報告「聾啞教育」第3号（1927.1）
15	第3回日本聾啞教育会総会 （1927.7.28～30） 開催校・東京聾啞学校	内容	「文部省諮問案一、聾啞学校に於ける職業指導の方法如何」答申 聾啞者に適した職業「農業、園芸、牧畜、養蚕、養鶏、養蜂、養魚、和洋裁縫、刺繍、和洋家具職、和洋建具職、竹細工、籐細工、鞆細工、折函ボール紙細工、履物職、靴工、金工、鍼力細工、金網職、傘及提灯職、陶工、製本、彫刻、義歯工、塗工、畳職、寫真師、活版印刷職、石版印刷職、画工、図工、造花、メリヤス編、染職工、製糸工、洗濯、理髪、結髪等」 選択方法「（イ）身体個性及家庭の事情を考慮すること（ロ）土地の状況を考慮すること（ハ）成るべく家庭的個人的に従事し得るものを選ぶこと（ニ）

			<p>成るべく交渉対応の少なきものを選ぶこと（ホ）聴力障害より来たる危険の少なきものを選ぶこと」 選択方針「一般共通科目（略）地方的特殊科目（略）」「第三の指導方面」「訓練方面（略）」「技術方面（略）」 ▶各校提出議題 4、聾唖技芸科教員を養成せられんことを其筋に建議すること（大分校） ▶研究題目 ・聾者の為に実験したる印刷業（日本聾話学校長 村上求馬） ・聾者の職業に就て（東京聾唖学校教諭 川本字之介） ・聾教育上に於ける手工業科の位置（東京聾唖学校訓導 島畑彦三） ・聾者の職業としての木工（東京聾唖学校助教諭 中島昇三）</p>
		出典	日本聾唖教育第三回総会概況「聾唖界」第40号（1927.10）
16	第4回日本聾唖教育会総会 （1928.7.25～28） 開催校・函館盲唖院	内容	<p>▶研究発表 「聾教育ト手工教授 函館盲唖院囑託 小野恣」 一、聾教育上ヨリ見タル手工教授ノ価値 二、手話式聾教育口話式聾教育ト手工教授 A 手話式聾教育ト手ノ教育 B 口話式聾教育ト手ノ教育 イ、口話法教授ノ振興 ロ、言語発達ト手ノ運動トノ関係 三、聾教育ニ於ケル手工科教授ノ實際 A 低学年ニ於ケル手工教授 イ、趣味的実用的教材ノ選択 ロ、精神的欠陥ト教授法 1、依頼心矯正 2、独立的作業ノ奨励 3、協同一致ノ精神涵養 B 上学年ニ於ケル手工教授 イ、芸術的科学的的思想教養ト教材 ロ、精神的欠陥ト教授法 1、独創力ノ養成 2、勤勞ノ習慣養成 以上」 ▶聾唖部談話題 ・聾者ノ職業教育振興策ノ件（提出者 神戸聾唖学校） ・盲唖学校手工科教授ニ於テ模擬的ヨリ独創的ニ指導スル方法如何（提出者 静岡盲唖学校） ・各学校中等部卒業生（主トシテ技芸科）ノ就職状況承リタシ</p>
		出典	全国盲唖教育大会概況「口話式聾教育」第4巻第8号（1928.8）
17	第5回日本聾唖教育会総会 （1929.7.26～29） 開催地・吉野山	内容	<p>▶談話題 聾唖卒業生の指導教育上について各地の状況承りたし（熊本縣立盲唖学校提案） （熊本校） 中等部の上に研究科を二カ年置きて一般指導をなすが、特に卒業生の為の講習会を開き実科としては、木工、和洋裁縫、家事を練習せしめ、学科としては地理、公民的教材時事に関する事項、日用文等につき講じ或は練習せしめる （大阪校） 毎月一日十五日は学校に集るやう（自発的に）にし以前はこれを一日十五日学校と称し、尚定期的に講習を開くいづれも可成り多く参集し、教化上価値多し。 （東京聾唖） 卒業生より成る同窓会の機関雑誌「殿坂の友」を発行し、或は月次回、総会を開き、同窓者の親睦を図る。以前有志により楽善株式会社なるものを設立され聾者に家具製作をなさしめ以て實際生活としての職業指導をなすの方案を立て実行せしが種種の関係で廃止したるは残念であった。尚本年は卒業生女子有志者に手芸及び割烹の講習を開く計画がある。 （名古屋校） 昨年夏季に講習を開いた、尚市にて特殊教育講演会を開催し、思想善導、職業指導（實際家により市場との直接連絡を計る）或は結婚問題等につきても指導した。右の如く各校にて発表があったが未だ完全な具体的方案のないやうに見えた、学校教育ことに我等の特殊教育は一層これを学校にてのみ終らしめてはならぬ。卒業生は在学生の延長として特に本教育に携はるもの考を廻らさねばならぬ問題である。</p>
		出典	日本聾唖教育会第五回総会「聾唖教育」第9号（1929.12）
18	第6回日本聾唖教育会総会 （1930.7.27～29） 開催校・熊本県立盲唖学校	内容	<p>「談話題 二、中等部職業科に於て實際課しつつある学科並に実習時間配当状況承りたし（大分校） 提出校より自校に於て實際課しつつある学科及び時数並に実習時間配当状況について詳細なる説明ありし後、東京聾唖学校、大阪市立校、香川校等より夫々有益なる実状発表あり、結局職業科目は一般に課せられている木工、裁縫等の外、特に各地方地方に最も適切なる種類を選択することの必要を充分認むるに至る。」</p>
		出典	第六回日本聾唖教育会総会並に研究大会記録「聾唖教育」第11号（1930.12）
19	全国盲聾唖教育大会 （1930.8.2～3） 於・台北市/台湾総督府會議室（他）	内容	<p>「第二号議案 盲学校及聾唖学校卒業生ノ職業保護ニ関シ適切ナル施設事項如何」（台湾総督府諮問案） 第一委員長長野市立盲唖学校長小林沼三郎氏及び第二委員長大阪市立盲唖学校長宮茂次郎氏より夫々委員会の経過を報告した後満場一致可決。 【答申】 乙、聾唖学校卒業生ノ部 一、聾唖学校総督府及各州廳ニ聾唖卒業生ヲ置キ職業ノ選択就職及就職後ノ補</p>

		<p>導ヲナスコト</p> <p>二、私立聾哑協会、聾哑者保護会又ハ聾哑者後援会ヲ設ケ公立職業係ノ缺ヲ補フベキ途ヲ講スルコト</p> <p>三、聾哑学校職業係及私立諸団体ニ於ケル保護施設事項</p> <p>イ、職業科卒業生ノ為ニ一種ノ授産場ヲ設クルコト 此ノ授産場ハ技術ノ修練並授産ノ両目的ヲ達スベキ施設ヲナスコト 此ノ授産場ハ聾哑学校総督府及各州廳ノ直接又ハ此等ト連絡アル個人或ハ団体ノ経営トス 私設ノ授産場ニ対シテハ総督府及各州廳ハ相当ノ補助方法ヲ講スルコト</p> <p>ロ、職業係ハ授産場ニ入ラザル者ノ指導保護ニ任スルコト</p> <p>ハ、職業科ヲ卒業シタル者或ハ授産場ニ入りテ更ニ技能ヲ修練セル者ノ独立シテ職業ヲ開始セントスルニ当リテ公立職業係又ハ私立諸団体ハ低利資金融通ノ途ヲ講ジ且ツ種種ノ便宜ヲ與フルコト 此ノ私立団体ニ対シテハ総督府及各州廳ハ補助ノ方法ヲ講スルコト</p> <p>ニ、聾哑者ノ独立シテ職業ヲ經營スル者ニ対シテハ營業税並ニ戸税ヲ免除スル途ヲ講スルコト (①より)</p>
20	<p>第7回日本聾哑教育会総会 (1931.8.25~26) 開催校・新潟県立長岡聾哑学校</p>	<p>出典 ①全国盲聾哑教育大会報告「盲教育」第3巻第2号(1930.7), ②全国盲聾哑教育大会概況「台湾教育」第338号(1930.9), ③全国盲聾哑教育大会「台湾時報」第130号(1930.9)</p> <p>内容 「文部省諮問答申 聾哑学校に於ける体育上特に留意すべき事項如何」</p> <p>二、教授に関する事項</p> <p>3、職業科に籍を置く生徒に於ては職業に留意し日常の生活状態から来たる悪影響を除去し作業能を高めるやう之が基礎的訓練をなすこと。</p> <p>イ、立業科を修める者に対しては軀幹屈伸の運動及全身運動を多く行ふこと。</p> <p>ロ、座業科を修める者に対しては脚部及軀幹運動を多く行ふこと。</p> <p>ハ、力業科を修める者に対しては軽易愉快なる運動を多く行ふこと。</p> <p>ニ、緩徐なる作業に従事するものに対しては敏捷なる運動及軽き力運動を多く行ふこと。</p> <p>ホ、作業から来る弊害を防ぐと共に一面各人の作業能力を向上せしめる為め従事する作業を助ける如き身体修練を行ふこと。</p> <p>▶協議題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本会研究部に於て聾哑学校中等部の洋裁科並びに工芸科(木工)の教授要目を研究しては如何(福岡県福岡聾哑学校提出) 評議員会にて「本会に於て聾哑学校中等部の洋裁科並びに工芸科の教授要目を研究しては如何」と修正して提出す。提出校の説明後、種種意見出で、之れを実施せる各校の中等部洋裁科並に工芸科の細目を互に各校に配布し合ふこと。 ・聾哑者に必要なる社会的保護施設如何(福岡県福岡聾哑学校提出) <ul style="list-style-type: none"> →問題の性質上談話題に廻す ・聾哑教育の根本義を職業教育に執りては如何(下関盲聾哑学校提出) <ul style="list-style-type: none"> →委任を受けし樋口会長より撤回す <p>▶自由研究題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聾哑者の職業教育と竹工(新潟県立長岡聾哑学校 宮沢末吉氏) <p>出典 ①第7回日本聾哑教育大会総会並びに研究大会「聾哑教育」第14号(1931.10), ②盲、聾哑教育会総会概況「越佐教育」第467号(1931.9)</p>
21	<p>第8回日本聾哑教育会総会 (1932.7.27~29) 開催校・山口県立下関盲聾哑学校</p>	<p>文部省諮問事項 盲聾哑教育ニ関シ各々ニ於テ特ニ施設セラルル事項ノ要綱及実績ヲ問フ</p> <p>【盲聾哑共通部】</p> <p>一、教授方面 (1) 能及適性検査 心理検査ノ機械ヲ備ヘ盲聾哑生徒ノ心理検査ヲナシ、又知能検査ヲナシテ盲聾哑生徒ノ知能尺度ヲ作り、又適性検査ヲ行ヒ普通教育及ビ職業教育上ノ参考ニセント努メ居ル学校数校アリ、何レモ最近ノ施設ニシテ未ダ完全ノモノト云ヒ得ザルモ知能尺度ハホボ成案ヲ得ントシツツアリ、適性検査ノ方案モ近キ将来ニ於テ成案ヲ得ル見込ミナリ。</p> <p>【聾哑部】</p> <p>四、雑 (1) 職業奨励 聾哑学校職業科ニ於テハ、完全ナル職業人ヲ養成セザルベカラズ、即チ技術優秀ナルノミナラズ、勤勉努力、眞ニ其ノ職ヲ案シムノ精神ヲ涵養セザルベカラズ、此点ニ関シ各々各ソノ方法ニ苦心シツツアルガ或校ニ於テハ、生徒ノ夜業ヲ奨励シ、其ノ労銀ノ一部ヲ与ヘテ、之レヲ貯ヘシメ、或ハ有効ニ使用セシメテ、經濟思想ノ養成ニ資シ或校ニ於テハ独リ在校生徒ノミナラズ、卒業生ニ対シテモ、尚適切ノ指導ヲ与ヘ、後援会経営ノ工場、或ハ其他ノ機関ヲ通シテ、職業人トシテ修養ニツトメシメツツアリ</p> <p>▶建議題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聾哑者が自己の修得したる技術を利用して生活し得る様職業紹介特別の授産等国家又は府県に於て保護施設を設置あらんことを其の筋に建議するの件 <p>▶自由研究発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職業教育所として見たる聾哑学校 (東京聾哑学校 山岡勲一) (①, ②より) <p>出典 ①第八回日本聾哑教育会総会並びに研究大会「聾哑教育」第18号(1932.10), ②第4回帝国盲教育会総会並臨時研究大会概況「盲教育」第4巻第2号(1932.12)</p>

22	第3回全国盲聾学校長会議 (1933.1.27~30) 於・文部省内会議室	内容	「一 文部省諮問事項 盲聾教育ノ振興ニ関シ適切ナル方案如何」 【答申】四、盲学校聾学校教育ノ実績ヲ挙ゲ又其ノ向上ヲ図ル為施設ノ改善、学校令及規程ノ改正ヲ行フコト 甲、施設ノ改善 五、盲学校聾学校生徒及卒業ノ為職業指導ニ関スル機関ヲ設クルコト」
		出典	全国盲聾学校長会議「聾口話教育」第9巻第3号(1933.3)
23	第9回日本聾教育会総会 (1933.8.29~30) 開催校・東京市立聾学校	内容	※職業教育に係わって特になし
		出典	日本聾教育会第9回総会概況「聾教育」第22号(1933.9)
24	第10回日本聾教育会総会 (1934.7.26~27) 開催校・和歌山県立盲聾学校	内容	▶談話題 ・中等部職業科中表具科又は園芸科或は理髪科を設置せる實際状況を承りたし(愛媛県立盲聾学校) ・中等部に既設の園芸科教授要項並びにそれに要する経費及び将来に就いて承りたし(佐賀県立盲聾学校) ▶自由発表 ・聾学校に於ける職業教育 三輪捨三郎(東聾) ・図画手工教育への考察 篠田稔(福岡)
		出典	日本聾教育会第十回総会並に研究大会概況「聾教育」第27号(1934.12)
25	第11回日本聾教育会総会 (1935.7.25~26) 開催校・岡山県立盲聾学校	内容	▶自由研究 ・図画手工教育に就て(岐阜校 篠田稔)
		出典	日本聾教育会第十一回総会概況「聾教育」第33号(1936.2)
26	第12回日本聾教育会総会 (1936.7.28~29) 開催校・岩手県立盲聾学校	内容	「文部省諮問案一、聾学校ノ教育ニ関シ特ニ改善ヲ要スベキ事項如何」 【答申事項】 第二、設備ニ関スル事項 四、聾学校ニ於テハ特ニ職業科実習室ノ整備ニ留意シ該科教育ノ実績ヲ充塞セシムルコト 第三、教育内容ニ関スル事項 二、現下聾教育ノ實際ニ省ミ特ニ指導精神ヲ確立スルコト 七、職業科ノ指導上特ニ精神訓練ニ留意シ且ツ職業ノ社会的並ニ倫理的意義ヲ十分自覚セシムルコト 第五、其ノ他 三、實際生活ニ於ケル職業戦線ノ實際ニ顧ミ特ニ卒業生ノ指導ニ一層留意スルコト ▶談話題 ・中等部職業科卒業生ノ就職状況承り度シ(佐賀) ・聾卒業生ノ就職ノ方途ヲ講ジテハ如何(香川) ・授産所経営ニツキ承り度シ(愛知) ・初等部ニ於テ職業指導セラルル学校アラバ学年及ビ科目承り度シ(佐賀) ・職業教育上委託教授ニヨリ実績ヲアゲラレツツアル所アラバソノ情况ヲ承り度シ(佐賀) ▶共同研究問題 ・聾学校に於ける職業教育の適切な方法(東京市立校、群馬校、東聾より発表あり)
		出典	日本聾教育会第十二回総会「聾教育」第37号(1936.11)
27	第13回日本聾教育会総会 (1937.7.25~26) 開催校・高知県立盲聾学校	内容	文部省諮問案 聾者ノ性能ニ適合セル職業科ノ種類如何 【答申書】 本案の答申をなすに当り先づ聾者の性能を考察し然る後職業科種目を選定せり尚聾学校の職業科は職業に関する一般的の基礎陶冶を含むは勿論なれども特に将来の生活に資すべきやう職業的陶冶をもなすべきを目標とす。 一、聾者の性能(略) 二、職業選択の方針(略) 三、職業科の種目 1、工芸科(略) 2、裁縫科(略) 3、手芸科(略) 4、農業科(略) 5、図画科(略) 6、洗濯科(略) 7、印刷科(略) 8、調髪科(略) 9、染色科(略) 【備考】 職業科の種目は多種多様にして一概にその適否は決し難きを以て其の選択設置に当たりては地方の状況に適したる種目を選びて其の設置の充塞を計るを要す尚本教育の進歩に伴い性能の矯正及び助長せらるると共に亦職業科種目の改変推移あるものと信す ▶自由研究 ・本校職業教育の経営に就て(愛知校 伊藤正長氏) ▶経験談公談 ・職業科の実習指導上放課後時間理由につき承りたし(長崎)
		出典	日本聾教育会第十三回総会記録「聾教育」第42号(1937,12)
28	第14回日本聾教育会総会 (1938.7.28~29) 開催校・鹿児島県立盲聾学校	内容	▶談話題 ・中等部ニ於ケル普通科ト職業科ノ時間配当ノ割合並ニ職業科ノ課外指導(五月、十二月)ノ状況承リタシ(大連校)

			<ul style="list-style-type: none"> ▶共同研究問題 <ul style="list-style-type: none"> ・職業科ニ於ケル基礎的教材配当案（東聾校, 愛知校, 東京市立校） ▶自由研究 <ul style="list-style-type: none"> ・我校の農業教育に就て（鹿児島校 新屋敷辰二） <p>農は我国の国本である。郷土に即しつつ敬天の土に親しみのんびりした心を以て働く。聾哑教育に於ては勤労愛好の精神を養成する事を主目標とせねばならぬ。我校では昨年四月から竹工科生徒を分離し農業を専ら学習する生徒を特立す。</p>
		出典	総会記事「聾哑教育」第47号（1938.10）
29	第15回日本聾哑教育会総会 （1939.10.14～15） 開催校・京都府立盲学校	内容	<ul style="list-style-type: none"> ▶建議題 「聾哑者を官立軍需工場に参加の途を講ぜられんことを其の筋に建議するの件」 →原案通り成立 ▶研究発表 「職業陶冶ノ具体的方案ニ就テ」 発表者 熊本校 高木政弘, 奈良校 糸原誠, 愛知校 小川豊, 長岡校 中島未吉, 大阪府立校 吉川政治
		出典	第十五回日本聾哑教育会総会並に研究会概況「聾哑教育」第54号（1939.12）
30	第16回日本聾哑教育会総会 （1940. 7 .28～29） 開催校・群馬県立盲哑学校	内容	職業教育に関する記事は確認できないが、文部大臣（橋田邦彦）は、「祝辞」の中で、「皇国の将来」は、「国家総力の發揮」にあるとして、聾哑者に「皇国民たるの資質練成」の重要性を述べている。さらに「宣言」では、紀元2600年に際し、「東亜の新秩序の樹立」のため聾哑者の「水準を正常の人に高め悉く皇国有為の民たらしめんこと」を日本聾哑教育会の総意として決議した。
		出典	①第十六回日本聾哑教育会総会並研究会概要「聾哑教育」第59号（1940. 9 ），②上毛新聞 第17969号（2面）掲載の大会記事より